

「ひっきりなしに「空襲警報」、激しく銃弾が降り注いだ」

蔵所 悟 （８０歳）

終戦の昭和 20 年 8 月 15 日、私は 5 歳でした。当時大阪市東淀川区下新庄に住んでいました。生まれは門真で、1 歳のとき養子縁組で養父母の下にやってきました。

戦争の悲惨さですが、淀川右岸の柴島・淡路辺りまでも米軍の空襲がありました。とくに長柄大橋に激しく銃弾が降り注いだことや、今の JR 吹田駅近くの旭通り商店街の空襲の被害を記憶しております。

私の住んでいた地区でも、ひっきりなしに「空襲警報」が出され、そのたびに昼夜を問わず、町内会指定の防空壕に避難しました。そして近くの田畑には、燃え尽きた焼夷弾が見受けられました。

この戦争で私の住居の地主さんが南方戦線で戦死されました。一方私の父は仕出し屋をやっていましたが、昭和 18 年召集され奈良の八連隊で訓練を受け、司厨兵として海軍に入隊、広島呉港から出航、国外を出る寸前終戦を迎えました。先に入隊された方々はたくさん戦死されましたが、幸いにも生きて帰って来ました。その間母と二人暮らしてでしたが、親族はじめ周りの方々に助けていただきました。

もうひとつ私の記憶に残っているのは、母に連れられた阪急（当時新京阪）淡

路駅のガード下での出来事でした。出征兵士の為の「千人針」を願う婦人達の「武運を祈る」よりもむしろ「無事生きて帰って…」というあの哀しい表情を忘れることが出来ません。

戦争が終り国民学校に入学しました。ガリ版刷りのプリントの教科書でした。私が通学した「新庄小学校」は1クラス 50～60 名で、ぎゅうぎゅうのすし詰め状態で、給食はバケツに入った脱脂粉乳が中心でした。

今私が強く思うことは、戦争というものは殺し合いをすることです。愚の骨頂、けしからんことです。生きている限り、微力ですが頑張りたいと思います。